



横須賀の歩んだ昭和

文／藤井明広（横須賀市自然・人文博物館）

第3回 久里浜の「ペリー上陸記念碑」

嘉永6年(1853)6月、アメリカ合衆国海軍のペリー提督(以下、ペリー)率いる艦隊が来航し、日本の開国を求めて久里浜の地に上陸しました。現在、横須賀市久里浜のペリー公園内には、ペリーの久里浜上陸を記念する石碑「ペリー上陸記念碑」(碑文には「北米合衆国水師提督伯理上陸記念碑」と刻まれている)が建っています(図1)。今号では、この「ペリー上陸記念碑」(以下、記念碑)の建立から昭和20年代までの動向を中心に紹介します。



図1 (筆者撮影)

記念碑建立のきっかけは、明治33年(1900)10月、ペリー来航時に少尉候補生としてプリマス号に乗艦していたアメリカ退役海軍少将ピアズリーが、久里浜を訪れたことにあります。ピアズリーは、米友協会(アメリカに留学・滞在経験のある政財界関係者による日米親善団体)の歓迎会に招かれた際、久里浜の地にペリー来航の記念碑一つ無いことを嘆き、遺憾の意を表しました。こうした発言を受けた米友協会の会員たちは、ただちに記念碑の建立を決議します。そして、明治34年(1901)1月には寄付金の募集が始まり、宮内省からも下賜金が寄せられました。こうして同年7月6日に記念碑の工事が完了し、7月14日には盛大な除幕式が行われました。その後、ペリー来航時の元水兵やペリーの子孫がこの記念碑を訪れるなど、記念碑は「日米友好の象徴」として人々に親しまれました。また、観光や軍の行軍(訓練)で立ち寄り先としても人々が訪れる場所となりました。

しかし、昭和16年(1941)12月8日にアジア・太平洋戦争が勃発したことで、両国は敵対関係となります。その結果、記念碑をアメリカによる「日本侵略の象徴」とみなす声もあがるようになりました。こうした状況の中、地元の翼賛壮年団が記念碑の破壊を求めて運動を展

開し、ついに昭和20年(1945)2月8日には記念碑が倒される事態となります(図2)。記念碑の跡地には、「護国精神振起之碑」と記された木柱が建てられました。ところが、同年8月に日本がアメリカなど連合国に敗戦すると状況は一転。敗戦から約3か月後の同年11月には早くも記念碑が再建されました。



図2

(横須賀市立中央図書館 郷土資料室所蔵)

その後、昭和22年(1947)7月14日には、記念碑の前で「ペリー上陸95周年記念式典」が開催されます。それ以降、横須賀市では「ペリー上陸記念祭」(昭和25年(1950)以降、「黒船祭」に改称)を開催することになります。とりわけ、昭和28年(1953)7月には、ペリー来航100周年を記念した「黒船祭」が盛大に開催されました(図3)。記念行事として、ペリー来航を描いた絵巻などの展示が行われたほか、久里浜の砂浜では黒船に見立てた軍艦や武士姿の出演者が登場する大規模なページェント(野外演劇)が催され、来場者を楽しませました。

こうして再び「日米友好の象徴」となった記念碑の前では、現在でも毎年夏にペリーの久里浜上陸とその歴史的意義を顕彰する式典(「水師提督ペリー上陸記念式典」)が行われています。



図3 (横須賀市自然・人文博物館所蔵)